

令和5年度 第1回北海道観光審議会アドベンチャートラベル部会 議事録

- 1 日 時：令和5年10月18日（水）17:10～18:45
- 2 場 所：TKP 札幌ホワイトビルカンファレンスセンター カンファレンスルーム60
（ハイブリット開催）

3 出席者

（1）北海道観光審議会 アドベンチャートラベル部会委員（五十音順）

荒井委員、鈴木委員、高田委員、矢ヶ崎委員（部会長） 計4名
欠席 石山委員、八木委員

（2）北海道（事務局）

後藤アドベンチャートラベル担当局長、奥水アドベンチャートラベル担当課長ほか

（奥水課長）

定刻になりましたので、ただ今から、令和5年度北海道観光審議会第1回アドベンチャートラベル部会を開催いたします。本日はお忙しい中、ご出席いただきましてありがとうございます。私は道庁観光局アドベンチャートラベル担当課長の奥水です。議事に入るまでの間、進行を務めさせていただきますのでどうぞよろしく願いいたします。

本日の部会ですけれども、委員6名いらっしゃいますが、6名のうち、石山様、八木様、本日欠席でございます。4名の出席ということで、高田様が途中から入られると聞いております。今3名という状況ですが、途中から4名のご出席で進行するというようになっておりますので、どうぞよろしく願いいたします。

それでは開催にあたりまして、AT担当局長の後藤から、ご挨拶申し上げます。

（後藤局長）

皆様どうもありがとうございます。部会の開催にあたりましてごあいさつ申し上げます。

本日、お忙しいところ皆様にご参加いただきまして、本年度第1回目の部会が開催できることに感謝申し上げます。

先日アジアで初めてリアル開催されたアドベンチャートラベル・ワールドサミット北海道・日本は、世界64カ国・地域から750名以上の方々が参加のもと、成功裏に終了したところでございます。

委員の皆様にはサミットの開催にあたりまして様々な形で、ご協力いただきました。本当にありがとうございます。

道では、昨年度までにアドベンチャートラベル部会の皆様に議論を重ねていただいた、新しいガイド制度である北海道アドベンチャートラベルガイド認定制度を本年7月に試行として開始いたしました。今回のATWSを通じまして、やはり今後の本道でATを推進していくためには、ガイドの能力の向上と充足が必要と再確認したところでございます。先月4日にはですね、第1弾として11名の方を認定し、知事から直接認定書を交付したところでございますけれども、今後この制度を育てながら、国際的にも評価される場合どの育成確保を図って参りたいと考えております。

本日の部会では、北海道アウトドア活動振興推進計画の指標の設定や、新しいガイド制度をスタートさせて出てきた課題となる点についてご議論いただく予定でおります。忌憚のないご意見いただくようお願い申し上げます、私の挨拶とさせていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

(奥水課長)

本日の日程でございますけれども、お手元の次第に従いまして、概ね 19 時を目途に、ご審議いただきたいと思っておりますので、ご協力よろしくお願いいたします。

それでは、これからの議事進行につきましては、矢ヶ崎部会長にお願いをしたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

(矢ヶ崎部会長)

東京女子大学の矢ヶ崎委員でございます。今年度もどうぞ皆様よろしくお願いいたします。それでは早速、議事に入っていきたいと思っております。議題の最初はアドベンチャートラベル・ワールドサミット北海道・日本の開催結果について事務局からご説明を頂戴することになっております。よろしくお願いいたします。

(福田主幹)

事務局北海道庁観光局の福田でございます。それではアドベンチャートラベル・ワールドサミット北海道・日本、ATWS2023 の開催概要についてご報告申し上げます。会場にいらっしゃる方は資料 1 をご覧ください。ウェブの方は、今投影されている資料をご覧くださいと思います。ATWS2023、会期を9月10日から14日、メイン会場を札幌コンベンションセンターとして64ヶ国、750人以上の旅行会社、メディア、政府・地域観光局の皆様が参加いたしました。

本資料の前半には、開催スケジュールを掲載しております。会期前にも希望者は、PSA・プレサミットアドベンチャーという体験ツアーに参加し、このスライドでは、4枚目になりますが、10日には、参加者が札幌市内に集まり、大通ビッセでイベントチェックイン、受付を行いました。そのあと、9月11日からの本会期となりますが、スケジュールの詳細は後日ご覧いただくとして、時間の関係上、具体的な北海道・日本の取組を中心にスライドの10番目からご説明をさせていただきます。

スライド10番目の体験ツアーのところをご覧くださいと思います。一昨年のバーチャル開催で行えなかった、参加者に地域の魅力を直に体験いただくツアーを本日ご参加の鈴木委員には、PSAを8コース造成頂くなどお力をいただいたところではありますが、各旅行会社の皆様のご協力をえた上で、そして荒井様、高田様はじめとするガイドの皆さんのお力もいただいた上で、無事各コース実施させていただきました。

会期前の数日間ツアーであるプレサミットアドベンチャーには道内外22コースに173名のご参加をいただきました。そして、スライドは、二つ後になりまして、12枚目のスライド、会期初日9月11日には、札幌発着の日帰りツアーであるDOAを31コースで開催し、547名の皆様に参加いただきました。

さらには、スライド2つ進みまして、ATWSの公式行事ではなく、実行委員会の独自事業として、

会期終了後に、サミット参加者のうち招待客区分のメディア、旅行会社、バイヤーの皆様を招待する「ポストサミットアドベンチャー」も、各地域の自治体や観光団体が主体となり実施することができました。

スライドがさらに2つ進みまして、オープニングセレモニーが、9月12日の夜には大倉山ジャンプ競技場で開催いたしました。セレモニーの後半に雨が降るあいにくの天気ではありましたが、実行委員会会長として知事が挨拶し、スキージャンプやアイヌ古式舞踊、ボーカルグループ「マレウレウ」や太鼓芸能集団「鼓童」などのステージイベント、そして、北海道の豊かな食やお酒を参加者の皆様にお楽しみいただきました。

スライドの次にいきまして、会場運営などラウンジでのPR等の部分ですが、札幌コンベンションセンターにおいても、道産食材を活用したランチを提供したり、道内関係団体の皆様とともにラウンジPRを行うとともに、各種講演カリキュラムの日程の中でも、日本文化を体験できるミニ講座、ミニツアーなどを企画開催させていただきました。

オープニングセレモニーや会場運営の準備につきましては、実行委員会各機関が集まり議論を進める中、ATTAアンバサダーの高田茂様にアドバイザーとして貴重なご意見いただきましたし、また荒井様には、9月14日、会期最終日に日本人参加者向けの分科会にパネリストとしてご登壇いただきました。誠にありがとうございました。

スライド、20番目、商談会の部分ですね、会期後半には、旅行会社同士の商談会、メディアとの情報交換会があり、参加団体の皆様、北海道の魅力をPRいたしました。最後のスライド21枚目のスライド、14日、最終的には、次年度開催地、パナマに対する引継式が行われ、会期終了ということとなりました。お陰様で、チケットが完売し、参加者からのSNS発信も多く行われています。

このサミットの成功を受けまして、会場の皆様、資料1-2に、和訳文を添付いたしましたが、ATWS実行委員会と主催団体のATTAとの間で、9月20日に「共同ステートメント」を発表いたしました。実行委員会とATTAは、今後も連携し、北海道・日本のAT推進に向け、観光庁、JNTO様とともに取り組み、日本を優れたデスティネーションとして、そしてアジア太平洋地域を先導する地域として確立することなどを目指すこととしております。

以上、時間の都合で簡単ではありますが、ATWSの報告とさせていただきます。以上でございます。

(矢ヶ崎委員長)

どうもありがとうございました。資料のどの写真を見ても皆さん笑顔で参加されていて、素晴らしい会だったんだということが確認できますし、大変心強い共同ステートメントが出されているということだと思います。どうもありがとうございます。

この部会の委員の皆様方が、大変重要な役割を果たしてくださったというATWSでありましたので、是非、荒井さん、それから鈴木さんの順で、感想なり手応えなり、少しコメントを頂戴できましたらありがたいと思いますが、荒井委員いかがですか。

(荒井委員)

荒井の主観でまずいきますと、私プレスサミットとデイオブアドベンチャーとポストサミット、

全部で3本やって、13日間ずっとガイドしていたんですよね。感覚的によかったのが、本当にずっと13日間お客さんと一緒にいるので、感覚的にこれOK、これ微妙、これ良くない、例えばレストランの食事だったりとか、オペレーションの手順とかが、実は結構いいメモが残ってます。

これはどこかで別な機会に共有したいと思います。コンテンツ自体は皆いいとしか言わないので、実はそれよりも、ガイドとしてここ違和感あるとか微調整みたいのが全てのPSAとかそういうツアーでみんな各々に感じられているはずなので、そこが多分、北海道全体のガイドとしてはよかったのかなって思っています。

大倉山のスペシャルメニュー。これもスペシャルメニューとして大有りだ、これは面白かったっていうのは、僕、実は多くの人に聞いたんです、これちょっと札幌の宝っぽく、これからも扱ってもいいのかなって思いました。

最後に、共同ステートメント、シャノン、ATTAとやったやつですね。僕これちょっと重要視しておりまして、つまり、今回イベントをやって、オフィシャルに、北海道側とATTAとで一つ区切りとしてわかりやすく、オフィシャルに出したと。これ、次のパナマにどう使うかという、その文言とかちゃんと拾って、現場レベルで概念的に書いてあるやつを、現場でこうします、アクションプランとかアクションして、それを来年パナマに持っていけるとATTAが北海道に残したものと、残したものを拾って現場でこうやってきましたと、また報告できる。これが次、重要なステップかと思ってメモしました。以上です。

(矢ヶ崎部会長)

ありがとうございます。荒井さんのメモは価値がすごい高いメモだったと思いますので、ぜひ皆さんと共有されて、またそれぞれのガイドさんがそれぞれに感じたこと、それらを集約していくという作業もすごく大事ですよ。レガシーとそれから次の発展っていうところまでお話いただきました。ありがとうございました。

鈴木委員はいかがでしたか。鈴木さんもとっても忙しく過ごされたのではないかと思います。

(鈴木委員)

実は、ATWS期間は全く私関わっておりませんで、暇にしておりました。うちのスタッフがPSA本体、そしてポストとずっと張り切って頑張ってくれまして、僕は、会費を払わなかったので1ミリも会場に入らず、寂しい期間を過ごしました。

ただ報告聞いていて、すごく学びは色々頂いておりまして、まず北海道の売り方が、欧米のお客さんが多かったということもあると思うのですが、北海道面をメインディステーションに1週間も10日も来る人っていないということが明らかにわかった。寂しいですけど、やっぱりメインの目的地であるゴールデンルートに来た3週間、1ヶ月滞在するお客様に対して北海道にいかにか3泊、4泊を分けてもらうかという戦略。ここをきっちり取っていかなくちゃいけないというのが、非常にどの報告を見てもどのレポート見ても弊社の社員が言っています。それが一つ。

もう一つは、多くの接触者に今回フォローをかけているわけですが、面白いことに未だにまだアジアを周遊中の方が多くて、本当にまだビジネスの俎上には載っていないのですが、これから、順番、優先順位つけてどうやってフォローしていこうかというのが、弊社の接触した

エージェントの方々への扱いになると思うのですが、それ以外の方々はどこにアプローチしたらいいか。

北海道の魅力なり、それこそ、パナマに繋がる価値は、ATTA の中で響き渡ったはずなのですが、あれだけのたくさん来てくださった方が、じゃあ一体、今どこに問い合わせをしたらいいのかなってところが非常にぼんやりしている。それをお客様のフォローの中で感じているのが現実です。

弊社はすごく絞られたことしかできないので、そういった意味では大きな団体を全然扱えないし、AT で大きな団体はいないのかもしれませんが、ちょっと荒井さんたちと、これからの展開を相談しなきゃいけないのかなという、そんなことを考えています。

(矢ヶ崎部会長)

ありがとうございます。ご指摘のとおり、ATWS の後、北海道に対する期待がとても高まっていて、ちょっと聞いてみたいなとか、実際、北海道で体験したプログラムをそのまま売ってよとか、色々あると思うんですけど、どこに、最初の窓口ですよ。そういったところでしっかり機会損失がない形で受けとめ切れるか。道内の適切なおところにつなげるか、なかなかこのあたりが山ですかね。ありがとうございます。

ではお2人からコメントいただきましたけれども、高田さんがまだご参加ではないのでいらしたらまた高田さんからもコメントをいただきたいと思いますが、この段階で何かご参加の皆様方ご質問等ございませんか。大丈夫ですか。はい。

すいません。私から1個だけ短く教えてください。道内でこの ATWS、どんな報道のされ方というか、道民にはどういう風に届いていたのかなっていうあたりがちょっとわかると良いかなと思うんですけど、感覚的なことで結構ですので、どんな感じですか。

(奥水課長)

ありがとうございます。道内での報道というところでございますけれども、期間中、道内の主要メディアの方々には、会場に来ていただきまして、初日の DOA はコース限定して取材 OK にしまして、2日目はプレスカンファレンスそれからオープニングのところを取材 OK としまして、また、その夜のセレモニーも取材 OK としましたものですから、その部分は、各メディアさん、新聞社もそうですし、テレビ局もそうですし、道内には、ニュースとして、流れております。

なかなかそれが本州の方、特に矢ヶ崎部会長がお住まいの東京の方には、情報として報道されているかというのはちょっと確認できていないのですが、道内では、かなりニュース等で流れておりました。道民の方には周知が十分できていたのではないかなというふうに考えております。

これからも、我々開催を終えてといったところでは、引き続き道民の皆様方にも訴えかけていかなければいけませんし、これからかだというふうに思っておりますので、引き続き皆様方よろしくお願ひしたいと思ひます。

(矢ヶ崎部会長)

どうもありがとうございました。確かに残念ながら東京の方ではほとんど報道されていなかった

た、でも観光業界の皆様方は会うと「ATWS だよ、今」と、結構話題にはなっていたのですが、そういうことなのかなと思ったりしています。これからですね。はい、ありがとうございました。

それでは議題、次に進ませていただきます。北海道アドベンチャートラベルガイド認定状況について事務局からのご説明お願いいたします。

(伊東主幹)

観光振興課の伊東でございます。よろしくをお願いいたします。会場にお越しの方は資料2をご覧ください、ウェブ参加の方は今お示ししております資料2 ご覧になっていただければと思います。

昨年度まで委員の皆様にご議論いただきました、アドベンチャートラベルガイドにつきましては、本年7月18日に施行しまして、同日付で申請の受け付け開始をいたしました。この場を借りまして委員の皆様方には改めてお礼申し上げます。チラシと実施要綱、実施要領を参考資料としてお配りしております。

施行後、道庁からプレスリリースを行いましたほか、新たに分野を追加しました民間のガイド団体に制度の説明、北海道マスターガイドの皆様に対しウェブによる制度説明をするなど、制度の普及を行いました。

その結果、9月4日には第1弾として、11名の方を新しくアドベンチャートラベルガイドとして認定しまして、6名の方に直接知事から認定証を交付したところです。

当日の様子は、メディアにも取り上げられたほか、北海道観光振興機構のアドベンチャートラベルのポータルサイトでも、認定式の様子を掲載しているところです。

認定状況についてですけれども、資料2に取りまとめております。分野ごとの認定者数の合計は、9月30日現在で19名となっております。資料にありますとおり、複数分野で認定されている方がおりますので、実人数は13名となっております。認定したガイドの方は、道のホームページに掲載しております。

今、画面に出ますかね。このような形で紹介しておりますが、今年度中に北海道観光振興機構のポータルサイトに掲載する予定となっております。

資料に戻っていただきまして、活動エリアごとの集計も取っております。活動エリアでは、全道を活動エリアとされている方が一番多くなっている状態です。事務局からは以上です。

(矢ヶ崎部会長)

はい、どうもありがとうございます。ただ今のご説明について何かご質問ご意見ございませんでしょうか。大丈夫でしょうか。はい。まずこういう段階から始まるという感じですね。ありがとうございます。それでは続きまして3つ目の議題に移ってまいります。次はですね、指標ですね、北海道アウトドア活動振興推進計画における指標の設定についてということで、事務局からご説明お願いいたします。

(伊東主幹)

はい。続きまして資料3をご覧ください。令和3年度に委員の皆さまにご議論いただきました同計画でございますが、計画策定の際、3つある指標のうち2つを設定し、1つを令和5年度を

目途に改定することとしておりました。参考資料4として、本日同計画添付しております。

改めて指標についてご説明いたしますと、1つ目は、体験型観光目的の道外観光客数となっております。前期の第四期からの引き継ぎで、北海道来訪者満足度調査から導き出したものです。過去の伸び率を勘案して設定されました。計画には資料4の16ページに記載しております。

2つ目がアドベンチャートラベル対応商品数で、計画策定にあたり、アドベンチャートラベルの推進の項目を新たに設定、追加したことに伴いまして設定されたものです。ATWS2021に向けて造成した商品数が59本であったことから、これを令和7年度までに3倍の177本にしていくというものです。以上の2つが既に設定済みの指標となっております。

次に3つ目が、今年度改定予定の北海道知事認定アウトドアガイドの資格保有者数の増加です。参考資料の11ページに記載がございます。こちらはアドベンチャートラベルガイド制度の検討を踏まえて、令和5年度を目途に改定することとしておまして、今年度のアドベンチャートラベル部会で検討を行っていただきたいと考えております。事務局案といたしましては、資料3の1ページ目の項目2に記載しましたとおり、新しいアドベンチャートラベルガイド制度が施行されましたけれども、北海道アウトドアガイド資格制度は並行して、制度が維持されておりますので、従前の北海道知事認定アウトドアガイド資格者数の増加の指標を残しまして、アドベンチャートラベルガイド数の増加の指標を加えた2つの指標にしたいと考えております。

項番2に北海道知事認定アウトドアガイド資格保有者数の数値の設定ですけれども、(1)の通り、前期では10%増加の560人を指標としておりました。達成率が89.2%と未定となったため、(2)のとおり、今期も増加率は同じく10%増とし、令和2年度実績500人を、令和7年度に550人にしたいと考えております。

もう1点、アドベンチャートラベルガイド数の増加の数値の設定ですが、資料3の2ページ目をご覧ください。先ほどご説明いたしました、現在のアドベンチャートラベルガイドの認定者数が延べ19名となっております。令和7年度までの認定者数の目標値ですが、本日皆様にご議論いただくために指標検討のための参考数値を(2)に示しております。

まず、令和3年度に実施いたしました、アウトドア事業者実態調査の回答の中からアドベンチャートラベルに対する取組状況とアドベンチャートラベルに対する理解度、ガイド業の収入実績600万円以上の割合を抜粋しております。

資料3の1ページに、アウトドアガイド資格者数を記載しておりますが、この人数をベースに指標設定するのですとか、2ページ目(2)の二つ目の四角に記載しました、既に設定しています、アドベンチャートラベル対応商品数177商品に対応した指標にする。3つ目の四角に記載しております、今年9月に開催されましたATWSのPSAの15コースに対応した資料にするなど、事務局で指標設定の検討に当たり参考となる数値を並べました。

これらを参考に委員の皆様から指標とする値につきまして、このようなものがないなど、ご意見を頂戴できればと思っております。

なお、ATWS開催期間中に行われた公式の記者会見でATTAのCEOであるシャノン氏が、道内で今後アドベンチャートラベルを推進する上での課題として英語を話せるガイドの必要性を指摘したと報じられたところです。

この報道を受けまして、今月初めまで開催されておりました北海道議会におきましても、アドベンチャートラベルガイドによる英語による対応能力強化などについて質問がありまして、研修

制度を実施する旨の答弁をしましたところ、委員より認定ガイドの目標数値については、英語能力の向上についても反映されるよう審議会の方にも申し伝えるようにとのご意見がありましたのでこの場でご紹介させていただきます。

事務局からの説明は以上でございます。

(矢ヶ崎部会長)

ありがとうございます。資料に記載されていない英語のことについての追加情報もいただきました。それでは、この四角い太枠のところの議論ということで事務局よろしかったでしょうか。

(伊東主幹)

はい。お願いいたします。

(矢ヶ崎部会長)

はい。ここの太枠のところについて、どのように考えていけばいいかということで、ご意見をいただいきたいと思います。今日決め切るということではございませんので、今後、こういう観点を取り入れて事務局の方で作業してくださいということに今日はなろうかと思しますので、どうぞ自由なご意見をいただければというふうに思います。いただければと思いますと申し上げても荒井さんと鈴木さんなので、すみませんどちらかで。

(荒井委員)

これは、でも、今、北海道アウトドアガイドを持っている人にどんどん呼びかけてやるしかないのですが、今持ってるメンバーがやっていくべきで、広く大海原にガイド資格を取ってねは、もう今までやってきていることなので、やるべきことは、僕が、荒井が、お前とお前取れと、一緒にやろうよというのを今あるガイドがやっていくのが、具体的数字が上がるその1。

でも、それをやる時には、自分がこのガイド資格の価値を認めていて、これいいぞって思っていてやることになるので、政策としてというか計画としては、なんなんでしょうね。なんか、ガイドの勉強会とかにも皆に言ってコミットしてもらって、1人でも増やしてみたいなプロモーションになるのかなと僕は思ってます。ちょっと、ここまでです、すみません。具体的にどうしたらいいとは言えません。

(矢ヶ崎部会長)

いえ。ありがとうございます。非常に確実な第1ステップではないかと思えます。本当にそうだと思います。鈴木さんいかがですか。

(鈴木委員)

まずは、ATガイド資格を増やすっていうテーマですか。全般でOKですか。

(矢ヶ崎部会長)

はい、どこからでもでも、今日は決めきるわけではないので、ご自由にご意見いただければ。

(鈴木委員)

まずこの今日の資料3の上から資料を見ていて、一つ非常に不安なのが、体験目的の来道が、この数ヶ月で明らかに減っているというふうに認識していて、弊社、北海道体験のサイトを運営しているのですけれども、明らかに申込が減っています。それから、道内のガイドさんたちと情報交換をしている中でも、LOVE 割が終わった瞬間にストーンと落ちて、そのまま伸びないという、今まさにその現状が見えていると情報を掴んでいます。

これ、気のせいならいいんですけど、夏場がもろに落ちたので、秋もまったく増えないまま推移していて、気持ちよく 8.3 を 10.3 で上げた時に、ものすごく現場のそれを踏まえて、言っているのかなっていうところは、気のせいであることを祈りたいというのが1点。ここはちょっと荒井さんしかいないけど、状況確認した方がいいかなって思います。この机上で目標設定しても、多分空論なるので、ガイドさんにヒアリングしても、そこは、作業としてやってもいいかなっていうのはすごく感じていました。

もう一つ英語力に関してなんですけども、前から同じ議論をずっとしてきて、アウトドアガイドなり、いわゆる文化体験、歴史的体験をする北海道の観光でお客様をご案内するガイドに英語を勉強させることと、いわゆる今の英語ガイド、通訳案内士に AT 要素を勉強させることと、どっちがいいかっていうのは、ずっと議論になっていて、1回私や荒井さん、その時のメンバーで出た結論は、後者なんですよね。もうガイドに英語を勉強させても片言まではいけると思うんです。それはすごく大事で、それは最低限やらなきゃいけないんですけど、じゃあ、高額のお金を払うお客様に満足を提供するために、その英語力で十分かということそれはちょっと別物。

体験を、アクティビティを楽しむ上での最低限の英語力をとというのはみんなで身につけよう勉強しようという働きかけはやりましょう。

ただ、もう一方で、通訳案内士さん、今回馬上さんが、いわゆる通訳案内士の方が AT 要素を勉強して自ら体験し、元々、林業のインストラクターであるというところから、あれだけの一流の方になって、今、四国なんかでは馬上さんは神様ですので、そういうことを考えると、英語の通訳案内士さんでいいので、彼らに、ちょっとこっちも巻き込んでいく、スルーガイドになりませんかという働きかけは一つ絶対あったほうがいいかな。

この次に出てくるのが、通訳案内士があまりにも高齢化が進んでいる。この ATWS でも、ものすごく話題になっていたみたいですけども、まず通訳案内士をちゃんと食えるように、若い人たちが活躍できるように、そのためにも、スルーガイド、AT という要素を認識して、こっちの仲間に入ってもらうように、そういうことにする働きかけが何より大事なかなと思います。

圧倒的な量と、それから AT っていう要素を満たしつつ、ここを大きくしていかなければいけないと思っています。マーケット的に言うと、ガイドは通訳案内士がスルーガイドをするんじゃないかっていう話なんですけれど、あとはドライバー。もうハイヤーのドライバーさんで英語ができる人がいなすぎる。

これも本気でインバウンドのお客様さんに北海道に外貨を落としてもらうっていうことを考えると、今ハイヤー協会さんとこのことも話をしてますけれども、ちょっと語学のできるドライバーがいなさすぎ、年齢が高くなりすぎ。どの業界もそうですけれど。

このボードでやっぱり検討する一つの要素かなっていうふうには思っています。とりあえず、まずご説明聞いて思ったことは、その3点でした。

(矢ヶ崎部会長)

はい、どうもありがとうございます。本当にそうだなあと思う論点のご指摘をいただきました。

過去からの伸びで伸ばすっていうのは、需要予測、予測の一つの手法ではあるんですけども、その手法を取り入れるにあたって、普通にリニアに伸ばして行って良い状況なのかというですね、ちょっと状況分析、今ご指摘にあったことのようなマイナス要因、伸びきらないんじゃないかっていう懸念要因なんかもちょうとやっぱり整理をした上で、最終的に目標って決めておいた方がいいですよ。

頑張ろう、頑張ろうだけでは、ちょっとなかなか難しいところもあるかもしれないですね。

はい、ありがとうございます。すみません。

高田さん入っていただきました。ありがとうございます。

(高田委員)

すみません申し訳ないです。

(矢ヶ崎部会長)

今ですね、お手元に資料ございますでしょうか。

(高田委員)

いや、今車の中なので見えないんですけど。

(矢ヶ崎部会長)

そうでしたか。

(高田委員)

今ちょっとお話を聞いていて、ちょっと論点がずれているんじゃないかなと思ったのは、一番最初に話が出ていたのは、スルーガイドよりも何よりも一般的なガイドさんにメッセージをするというのが第一条件でやってた気がするんですけど。その辺がずれてきて、通訳案内士にガイドを取らせるとか、そういった形の流れになってきているのかと思うんですけど、ここで別に反対はしないですけど、果たして通訳案内士さんが、付け焼き刃で自然のこととかを1年2年で勉強できるのかどうか。逆にそっちの方が危険だと思います。

(矢ヶ崎部会長)

スルーガイドではなくて、実際のガイドの方。

(高田委員)

実際のアクティビティガイドの方です。

(矢ヶ崎部会長)

はい。鈴木さん。このところはもう一度お話を整理していただけますか。

(鈴木委員)

高田さんおっしゃる通りで、アクティビティガイドはプロのガイドがやらなきゃ駄目です。でないと危険で、実際に楽しい体験ができないので。ただ、実際のお客様がこれから北海道で、議会で話題となったという英語力っていう話と、ATWSの現場で英語のできるガイドさんが少ないよねっていう文脈でいくと、まずガイドさんが、片言でもいいからちゃんと英語を勉強しようっていうのがまず大前提。次に、お客さんにお金を払ってもらうためには、そのアクティビティガイドさんの事を説明して繋ぐスルーガイドがあまりに足りない。そこはアクティビティのガイドさんではなくて、英語でお客さんを連れて歩く、アクティビティにつなぐ英語力の話を今していました。

(高田委員)

わかりました。であれば、いいのかなと思いますけど。

(矢ヶ崎部会長)

はい。ありがとうございます。

(荒井委員)

高田さん、あれですよ。僕らが現場のアクティビティガイドとしては、アクティビティカンパニーの、僕らが新しく入ってくガイドさんのクオリティをコントロールして、1人前になれば出せるし、駄目ならもう少しトレーニングしてっていうふうに、アクティビティガイドは結構ね、カヌーカンパニーとかハイキングガイドとかなので、そんなふうになって、僕はクオリティコントロールしていけるといいのかなと思ったんですけど、どうですかね。

(高田委員)

いや、僕はそう思っているんです。うちのところでもやってますけど、例えば、カンパニーではない1人親方のところはどうするんですかっていう話ですよ。

(荒井委員)

うん。うん。

(高田委員)

努力してもらわなきゃいけないというのはわかるんですけど。場数を踏まないと多分、伸びていかないですよ。だからそこは逆にスルーガイドさんと二人三脚でやってくしかないのかなと思いますけど。

(荒井委員)

そうですね。ありがとうございます。

(矢ヶ崎部会長)

はい。ありがとうございます。また、アクティビティの方々とスルーの方々と、ちょっと分けて意識して話していきたいと思えますけれども。そういうことですかね。はい。他の観点で指標を考える時にはもっとこういうことを考えておいた方がいいとか、そういうことはございませんか。

(鈴木委員)

AT の対応商品数の 177 っていうのは何を指してるんでしたっけ。ちょっとごめんなさい。今更怒られるかもしれないけれども。PSA の 15 本っていうのは、つい最近のことだったんであれだなんてわかるんですけど。177 商品っていうのは。

(矢ヶ崎部会長)

はい、じゃあ、せっかく今の鈴木さんから、ちょっともう一度意味の確認をしてくださいっていうご発言が入りましたので、高田さん移動中で資料ご覧になれませんので、画面は今ご覧になれていらっしゃいますか。

(高田委員)

画面は見えます。

(矢ヶ崎部会長)

はい。事務局は大変申し訳ないんですけども、今、指標として論点して欲しいところについて端的にもう一度お願いしていいですか、ご説明。

(奥水課長)

はい。私から説明させていただきます。177 商品とありますが、このベースになってるのは、令和 2 年度の 59 商品という数字でございます。これは何かといいますと、指標を決めた当時、ATWS2021 の開催に向けて、既に AT 商品を開発しておりました。

PSA は道内で、今年もそうだったのですが 15 コースありました。また、DOA が今年 31 コースでしたけれども、その当時はまだ 29 コースでやろうというふうに考えておりました、その 15 + 29、残りの 59 コースとの差は、それだけではちょっと足りないだろうということで、これからの ATWS2021 開催するということを想定しておりましたので、ショーケースに載せるために追加で商品を開発していたものがあり、合わせて 59 商品を開発していたところです。

この 59 商品はですね、全道いろいろな地域で AT と名のつく商品が開発されているかと思いますが、内容が必ずしも全てのものが AT のレベルに達していないものも多くありまして、我々の方で審査会を設けまして、色々な基準を設定し基準点を設けまして、一定の基準点を超えている商品を 59 商品選んだということです。

引き続き商品開発は進んでおりまして、今 96 商品まで積み上がっているところでございます。

96 と 177 の差がまだまだありますので、これも引き続き、同じような手法で審査し、一定のレベルに達しているものを 177 商品そろえていくということで今動いているところでございます。

(鈴木委員)

どこで96商品見れるんですか。

(奥水課長)

こちらの商品につきましては、今ATポータルサイトがありまして、そちらの方で商品が載せているところがございます。観光振興機構で運営しているATポータルサイトです。

(矢ヶ崎部会長)

はい。今画面されていますが、そのままにしておいていただいて、資料3で論点にさせていただきたいことについてもう一度、途中から入られた高田さんのために端的にご説明してもらってもいいですか。

(伊東主幹)

はい。本年度、皆様にご議論をいただきたいのは、知事認定アウトドアガイド数の計画がございましてそちらの指標が未定になっているものですから、こちらについて検討いただきたいということです。

(矢ヶ崎部会長)

太枠の部分だということですね。

(伊東主幹)

はい、太枠の部分です。以前、北海道アウトドアガイド資格者数というものが指標として定めておりましたので、今回、北海道アドベンチャートラベルガイド数というのも今年度できたことから、この2つの人数を指標として設定したいというふうに事務局は考えております。

そちらの件について、アウトドアガイド資格者数につきましては、従前まで増加率10%という設定の仕方をしておりましたので、今回の令和7年度までも10%増の、数字の550人っていう指標はいかがなものかということで、ご議論いただきたいのと、もう一つは新しくできましたアドベンチャートラベルガイド数の増加についてはどのような指標を設定したら良いかということをご議論いただきたく、資料3に参考となる数字を示させていただいたところです。

(矢ヶ崎部会長)

はい、ありがとうございます。高田さんすいません。ご覧になられている太枠のところなんです。知事認定アウトドアガイド数、この指標をこれからこの部会で考えていかなければいけないということで、既にアウトドアガイドの数っていうのは、従前からあるんですけども、これにATガイドという指標を加えて2つの体制にしていったらどうだろうかという事務局の提案であります。

(高田委員)

そうなんです。分ける必要があるのかどうかってところもあって、僕は思います。

(矢ヶ崎部会長)

1個で良いんじゃないか。

(高田委員)

はい。

(矢ヶ崎部会長)

どちらですか。

(高田委員)

どちらでもいいです。僕は。ただ、何が違うのということです。ATガイドと一般のガイドと何が違うんですかって、誰がその判断をするんですかっていうことですよね。

今ATガイドさんになってる人達が19名いますけど、その人達で、ATをきちっと理解してやっている人達が何人いるんですか。違いがわかんないんです。

(矢ヶ崎部会長)

ご意見いただきました。まず今のご指摘も踏まえて、知事認定アウトドアガイドの数とATガイドの数という二つでいくのか、これどうするかっていうことについて、ちょっと他の方々からもご意見いただければと思いますが、いかがですか。

(荒井委員)

なので、これまで北海道アウトドアガイド制度でした。それに今よりオントップで英語とサステナビリティとバッジを付加することで、今までのアウトドアガイドの認定に加えて、さらに能力高い者ができちゃいますよっていう紹介の仕方なので、何が違うかという観点に関しては、これまでも随分何度も話していることと思うのですが、新しい能力が加わって、世界に向けて、社会に向けガイドできる能力を持っていますよっていうのがわかりやすく整理されてるのかなと僕は理解しています。

(矢ヶ崎部会長)

はい、ありがとうございます。鈴木さんはいかがですか。

(鈴木委員)

根本から整理をさせていただくと、北海道アウトドアガイド資格制度というのは、これまで脈々とやってきました。でも、ジャンルがちょっと足りない、国際的に通じる資格制度にしたよねっていう2つの要素から縦と横にATガイド資格制度というのを作りました。

よって、やっぱりこの今のAT認定者がどうっていう話よりも、この観点で、ATガイド資格制度をパスする人を北海道は増やさなければいけないというのはこれまでのATの取組みの文脈上、間違いない流れだとは思いますが。

19人の延べの数を増やしていこうぜっていう目標を立てなきゃいけない。極端に言うと、外国

のお客様をお相手しないから英語はいらなくて、そこまでサスティナブルなんか気にしなくても俺はいいんだと言う人はいるかもしれないけれど、理想をいうと 500 人の北海道アウトドアガイド資格者は必ず AT ガイド資格を目指して欲しいし、プラス、バックカントリーとかサイクリングとか、これまでの北海道アウトドアガイド資格制度がカバーしていないジャンルの人が増えていったら、論理的に言うと、AT ガイド資格制度の方が数が多くなるはず。というのが一番美しいスタイルだと思います。

ただ、現実はそのでもないで、実際に延べ 19 名しかいないんですけど、これを意思を持って AT ガイド資格制度に乗っかる人を増やそうぜ、っていうさっきの荒井さんの話。今の 500 人の北海道アウトドアガイド資格制度をクリアしている方々への働きかけっていうことはやらなきゃいけないっていうのが前提。

2 点目として、北海道アウトドアガイド資格制度をとっている人が、素直に 10% ずつ増えていくのか、今さっき、ちらっと嫌な言い方をしましたけども、本当にマーケットがあるのかっていう懸念もあると思うんですよね。だからそこは単純に 10% アップっていうのは、全くバックアップの理由がないので、そこはちょっとどう考えたらいいかなというのは思っていました。

元々この 500 人も稼働してる、してないとかいろんな議論がありましたよね。だからそこはちょっと目標設定の部分でどうかなあというのは、僕答えないんですけど、検討しなきゃいけないかなと思います。整理はそういうことで正しいですよね。

(矢ヶ崎部会長)

ありがとうございます。二つでいこうというご意見が多いわけなんですけれど、ただ、レベル感、そうですね、10% で増えるのか、というところに関してはちょっと、どういう風に考えたらいいんでしょうかね。

(鈴木委員)

もう一つ言うと、増やすという馬なりに 10% 増えましたっていうのは目標と言わないので、10% 増やすためにどう手をうって何をするのかっていうのが後ろにあった上で目標設定だと、僕は思うんです。

今、現実の 500 人でガイドは足りないのか、いわゆる修学旅行のエージェントとか旅行会社さんが、安心して頼める北海道アウトドアガイド資格制度持ってるガイドが頼んでいるエリアで足りないよという言葉が出てるのであれば、20% とか 30% とかいう目標にしなきゃいけないかもしれないし、なんかそのリスニングはないと、ちょっと設定するのは難しいかなあと思います。

AT ガイド資格というのは、もう間違いなく意思を持って作ったわけですから、これはもう 19 どころか、逆にどのぐらいで事務局はお考えですかって聞きたい。100 なのか、とりあえず 50 なのか。そのジャンルごとに、スルーガイドは今それが一人ですよね。僕はやっぱりここは厚くならないと、全然数字は議論にはならないなと思ってるし、そこはどんなものでしょうか。荒井さんどうですか。

(荒井委員)

はい。僕も賛成ですというか、結構、根拠を持って増やせるかなと思ってます。みんな取らなければ仕事できなくなるっていう状況にはなってきたということですね、国際観光においては。

なので、宝島さんもやっているトラベライフは JTB もやっているし、旅行会社の国際認証制度の取れる条件としては、ちゃんとライセンスを持ったガイドに仕事発注してますか、みたいなもので条件が変わってきておられますので、逆に資格がないとできなくなっていくと。

そこからは、今鈴木さんが言ったとおり、北海道アウトドアガイドだけだと北海道だけの考えになっていて、資格としてももちろん無いよりは良いんですけど、国際的な AT ガイドっていうスタンダードに見合った資格にこの北海道アドベンチャーガイドもなっていないといけないうって考え方から、それを持っての方がより仕事になる、逆に無いと旅行会社などに発注できませんよ、みたいな社会になってきているという観点から、重要。今、トラベライフという旅行会社の資格制度の話をしましたけど、グリーン・デスティネーションズという、持続可能な観光地域づくりの観点からも、そこにどのぐらいクオリファイのガイドさんいますかっていうのは問われてきていて、今年実はつい先週発表があったんですけど、ニセコと弟子屈がそれに表彰されるようになってきている。全国的に観光庁も力を入れているところなので、社会的な波が来ているというのも、実際にあると理解してます。

(矢ヶ崎部会長)

はい。ありがとうございます。ニセコはいきなりシルバーですよ。見事というか、びっくりしましたけれども。国際認証からの要求っていうのも無視できないものになりつつありますね。

(荒井委員)

条件になってますね。逆に。

(鈴木委員)

僕はこの AT ガイド資格制度を、高田さん、荒井さん達と一緒に作った立場としてですね、すごく今大事な位置にあると思っていて、なぜじゃあ高田さんとか渡辺敏哉さん、安藤誠さんが取ってないのかっていう議論になると思うんですよ。だってなくたって商売できるもん。

荒井さんのおっしゃるとおり、これからの若いガイドさんとかは、国際的認証されているガイドですよっていうのは、商売にとってすごく追い風になるはずなので、そういう方も増えてくると思うんですけど、今この1、2年で取り組む舵を間違えちゃうと、取んなくてもいいんじゃないって話にまたなっちゃう。

それでいくと、やっぱり最初の資格制度を作る時の議論でもあったように、記録に残されるとまずいけど、やはりこちらから、クリアされてますよねっていう人は、もうこちらから認定をお願いしに行く、出してください認定してあげますからっていうスタンスでは絶対乗ってこないでそういう方々は、やっぱりそのスタンスを間違えちゃうと、このまま1年経って、2年経ったら AT ガイド制度が骨抜きになっちゃう、というか、なる人がいなくなっちゃう。これは駄目ですよ。

だから、高田さんとか安藤さんとか敏哉さん筆頭に、本当に外国のお客様を満足させているガイドさんは他にもまだいっぱいいるので、そういった方々にこちらからお願いしてシンボリックになってくれと。もちろん、制度上の一定の手続きは必要だと思うけど、こっち側で書く位の勢いで、取ってもらっちゃわないと、多分、馬なりにさっきのあと 10%ぐらい増えて欲しいな、25 人なんていっていたら、多分、制度が終わってしまう。全国的には多分注目されているし、ここはすごく大事なポイントかなというふうには思っています。

(矢ヶ崎部会長)

はい、ありがとうございます。

確かに AT ガイドについては、かなりの戦略性が必要ですよ。作り込みといってもいいと思いますけれども、第一段階は、動いて数というよりも中身がしっかりできていていくという第一段階を経ないと、その先に広がっていくところが見えてこないんじゃないかなあとと思いますね。そのこのところをしっかりとやるという意味も含めた人数目標になっていくんじゃないでしょうかね。

いずれにしてもアウトドアガイドにしても AT ガイドにしても、そういう実態を踏まえた数字っていうところ、落としどころにしていけないと、ちょっと説明がつかないというか、実際として厳しいところがありますよね。

そういう難しさをはらみながらということだと思ったりします。

今日は委員の皆様方全員が参加してる訳ではありませんので、ご参加の 3 人の方のご意見しっかりお聞きをしてということで継続審議になると思いますけれども、次回また審議ということになりますから、ちょっともっと言っておきたいことがあったらぜひ言っていただければと思います。事務局の方でも何かこの件確かめておきたいということございませんか。

(伊東主幹)

今、実態を踏まえた数字が必要というお話いただきました。事務局の方でも令和 3 年度に、アウトドアガイドさん向けの実態調査をしましたけれども、今年度もこれから実態調査をしてヒアリングをした上で、前回と比較できるようなアンケート調査と実態調査を近日中にすぐやる予定になっておりますので、その辺の集計結果も踏まえまして委員の皆様と共有して、議論を深めていただければと思います。以上です。

(矢ヶ崎部会長)

はい、ありがとうございます。事務局がしてくださる作業に加えて、先ほどからご指摘がある AT ガイドについては、一体誰と誰とに入ってもらって、そこで固まった数字で、それぞれに、また声をかけてもらって、そういうような人と人との繋がりの中でガッツリ増やしていったらどこまでいけるのかみたいな、そういう観点からもちょっと見ておく必要があるようにちょっと思ったりもいたしました。

ちょっとね、泥臭いやり方を想定したようなところも必要になってくるんじゃないですかね。

最初のレベルの高い AT のガイド集団を第一段階として作っておかないと、確かにその先は結構難しいところ行くかもしれません。第 1 段階として、今申し上げたことの指標については人

数ということで、まずは良いのかもしれませんが、ゆくゆくは人数だけではなくて、もうちょっと中身を見ることができる、サブインデックスみたいなものも主要指標にぶら下げるってということもあろうかとも思いますので。ただ、今、立ち上がったばかりですから、とにかく良質な次に繋がる母集団を作っていくんだってというようなところって感じが大事なかと、ご意見拝聴して思ったりいたします。

今日は決めていきませんので、また、今日のご審議を踏まえて次回にということにしたいとしますので、事務局長ちょっと大変ですけどもよろしくお願いいたします。

(鈴木委員)

現時点での進め方としては、例えば乗馬とかSUPはゼロなわけですよね。だけど、自薦他薦含め、もしかしたら自薦がないからここに人数が入ってこないの、ある意味他薦ですよね。もう業界の人間なり、旅行会社なり、ITの関係者なり、北海道に住んでいる外国人なり、そういうのも含めて、こういう人達じゃないかって一回リストアップしてみて、それは、裏でやんなきゃいけないと思うんですけど、それを皆で見ながら、やっぱこういう方になってもらわないとこの制度成り立たないよねっていうぐらいの精度で、こちらから連携してあげるんじゃないかと、認定させてくださいとお願いに行く。そこでの数値目標を立てるのが、多分1年目2年目もすごい肝要かなっていう気がします。

その上で、やっぱりこの人達、かっこいいし食えているし、目指すべき姿だしっていうところで、次の世代があがってくる。制度作った時の設計はそうだったはずですよ。

(矢ヶ崎部会長)

ありがとうございます。それではそろそろ次の議題に移っていきたいと思いますけれども、この指標の件に関して言い残したこととかございませんか。とりあえずは大丈夫でしょうか。

はい。ありがとうございました。それではですね、事務局には何度も申し上げますが大変ですけども、今のところ論点整理した上で、ご協力も委員からいただけるとしますので、ちょっと作業をお願いしたいと存じます。

次は4つ目ですね。北海道アドベンチャートラベル認定等制度の運用のうち、項目の1と2を先にやるということですので、事務局からご説明をお願いいたします。

(伊東主幹)

はい。資料4を基にご説明差し上げます。

議論の中で、ガイドの能力向上のための仕組みが必要ということで、アドベンチャートラベルガイドの技能向上促進のための研修制度というのを、要綱で決めました。

今年度の取組状況をご報告差し上げます。先ほども話題になりましたが、アクティビティガイドの方への英語コミュニケーション力という研修を今年度実施することになっておりまして、現在、告示中で実際は来年の2月になる予定になっております。

具体的な日程がそれぞれこちらになっております。サステナビリティに関しましては既に実施しておりまして、今日、出席頂いております、荒井さんには講師もいただきましてありがとうございます。また、高田様にはスタッフさんも含め研修に参加していただいております、この場を

借りて、改めて御礼申し上げます。このような状況で着実に技能力向上の研修については実施しているところです。

資料4の2ページ目をご覧になっていただきたいと思います。

アドベンチャートラベルガイド認定等要綱の改正についてなんですけれども、先ほど鈴木委員の方からお話ありました通り、アドベンチャートラベルガイドを認定するのに部会の皆様にご議論いただき、ガイドの従事日数ですとか、推薦者というのを決めさせていただきました。

実際に私ども7月から試行開始してみまして、見直していただきたい事項が出てきましたので、皆様にご議論いただきたいと思います。

1点目は山岳の冬山分野とサイトカントリー、バックカントリーの必要従事日数です。複数の分野を認定している事例があるんですけれども、カヌー、ラフティング、SUPの3分野については、従事日数を通算することを認められておりますけれども、山岳の冬山分野とサイドカントリー、バックカントリーにつきましては、同じスノーシーズンのガイドングでありますことから、こちら通算することを可能として、従事日数の冬山を200日からサイドカントリー、バックカントリーと同様の120日に変更することを可能にするという趣旨で、今回記載させていただきました。

もう1点、ガイドの従事日数の推薦者についてでございます。サイクリングなど新分野の推薦者は、ガイド協会の検定資格を持つ者、または上記に相当するものとして認められる者というふうにしておりますが、既存の5分野につきましては、マスターガイド若しくは実技試験の試験官のみが推薦者というふうになっております。

資料4の3ページ目の改正理由にもありますとおり、推薦者数を拡大したいと思っております。既存5分野につきましても、相当する者というものを追加するとともに、事業所にお勤めの方につきましては、事業所からの証明があれば、推薦者からの推薦を不要とするというふうに拡大させていただきたいという趣旨でございます。

事務局からは以上でございます。

(矢ヶ崎部会長)

どうもありがとうございました。

最初は研修の実施状況のご報告ということですので、次に、説明がありました、事務局の方ですね、要綱の一部を改正するほうが良いのではないかという、事務局提案が2件出ております。最初がですね、もうちょっと大きくしていただいて、はい、ありがとうございます。

最初が、(1)のガイド従事日数の必要従事日数について。冬山これ合算でと、通算で2年間で120日でいかがかというご提案ですけれども、どうでしょうか。なんか昨今の自然条件を考えると。

(荒井委員)

いや、僕も最初たくさん出てないと、と思ったんですけど、実際このぐらいの日数だと思います。なかなか200日ないと思いますのでこれが妥当だと思います。

ちょっとうちのスタッフにヒアリングしたんですねこの件。周りのガイドやっているメンバーに実際どのぐらい動いてるかって言ったら、200日は多過ぎますね。

(矢ヶ崎部会長)

大体 120 日ぐらいが妥当な感じということですね。ありがとうございます。
鈴木さんはいかがですか。

(鈴木委員)

荒井さんにお聞きしたかったのは、今回事務局案のところは正しいかどうかの判断ですよ。120 日で満たすか。例えばお客様の要望でバックカントリーがしたいんだ、冬山の登山ではなくバックカントリーなんだというのと、ハイクアップするでしょっていうのは置いておいて、バックカントリーを 120 日しなくて、山岳とサイドカントリー、もしくは極端にいうとサイドカントリーだけ 120 日やってる人がバックカントリーはできるんですか。荒井さんどう思う。山岳(冬山)は 120 日 2 年間でやってました。バックカントリーはやったことはない人がいます。

(荒井委員)

つまり分野が違うという話ですよ。

(鈴木委員)

これを合算してもいいのかなということです。

(荒井委員)

日数が長すぎるのは短くした方がいい。

(鈴木委員)

200 日を 120 日にするのはいいですよ。

(荒井委員)

ちょっと今何とも言えないです。例えば僕はネイチャーガイドじゃないですか。自分のガイド日数をカウントすると今日は山岳で出たというのがある、確かに単純に自分の場合は、日数ただ足したんですよ。どんな分野であろうと、ネイチャーガイドなので安全管理って一番その差とかはないのでね。山岳ガイドもたくさんネイチャーガイドもやっているという問題が出てくると、今の鈴木さんみたいな問題が出てくるなと思いました。考えなきゃわからないですね。これは。

(鈴木委員)

カヌーとラフティングを合算しようというのは何となくウォーターアクティビティのレスキューと違って、一緒にやるじゃないですか。それは良いと思うんですけど、僕はその不勉強というかバックカントリーを自分でやらないので、バックカントリーでめちゃくちゃ危険度が高いような気がしていて、その時に引っかかっているのはここだけで、バックカントリー分野も合算して OK と言っていいのかなあっていう、それを詳しい人に聞いたほうがいいなと思います。

(高田委員)

逆にバックカントリーで 120 日合算でも数えられるくらいのガイドなんていないと思います。体力的に。

(鈴木委員)

そうですね。俊哉さんくらいですね。

(高田委員)

逆だと思いますよ。バックカントリーで 2 年間で 120 日なんてありえないと思う。もしやっている人がいたらその人は危険な人だと思う。

(荒井委員)

僕とか高田さんで話すんですね。このくらいの日数をやらないとだめだよというのは。

(高田委員)

今いない人のことをいうのはあれですけど、山崎さんがやたら 200 日と盛んに言っていたので、そこまで言うなら、しゃあないんじゃないという感じで受け止めていました。

(鈴木委員)

まさにだから、バックカントリーガイドでバリッとやっている人達に、どのくらい日数をやっているのか調べて、その上で、ついでにさっきの話で言うと、どうして認定するのかという前提で調べられたらいいのではないのでしょうか。

(荒井委員)

賛成です。

(矢ヶ崎部会長)

これもちょっと実態をみていただいて。高田さんご指摘のとおり、バックカントリーだけで 120 日ということはないだろうと思うので、通算 120 日のうち、バックカントリーもあるしサイドカントリーもあるしというその按配ですね。そのあたり、実態を聞いていただいてということだと思います。皆さんに共通しているのは、200 日は長いでしょうと。少し削りましょうという時の合算の仕方については実態を踏まえてちょっと検証した上で、120 日にしましょうってということだと思いますので、そういう辺りで、事務局の方で対応大丈夫でしょうか。

(伊東主幹)

はい。こちらの方で、実際に山岳ガイドの皆様ヒアリングを行った上で、改めて委員の皆様と語りしたいと思いますのでよろしくお願いいたします。

(矢ヶ崎部会長)

はい、ありがとうございます。やっぱりこの部会は何でも実態とマーケット踏まえてっていうことでいいんだと思います。はい。荒井さんももうちょっと考えていただいて何かありましたら、事務局の方をお願いします。ありがとうございます。

もう一つ、検討していただきたいというのがありまして、もうちょっと下の方に移っていただいて、はい、推薦者のことですね。ここについてはいかがですか。この、太字かつ下線がある部分を追記しましょうという事務局案ですが、いかがでしょうか。

(鈴木委員)

異議ないです。新分野はいいですね。認められるものです。いいと思います。

(矢ヶ崎部会長)

OK ということで。はい。荒井さんいかがですか。

(荒井委員)

はい。これが妥当だと思います。

(矢ヶ崎部会長)

高田さんも。

(高田委員)

推薦者ですね。僕はここがひっかかっていたんですよ、ずっと。推薦者が果たしてATのことを理解している推薦者なんですかということなんですよ。

アウトドアガイドの方がマスターになっているのはわかります。でもマスターガイドが果たしてアドベンチャーのことを勉強したりしているのか、それとも全くわかんないで、10年でマスターになったからそれでいいのという話をこの間も興水さんの方に言ったのですけれども、それってどうなんでしょう。ガイドとしての能力はもちろんあると思います。

(鈴木委員)

高田さん。この推薦は基準日数のことだけですよ。この人そんだけの日数やっているよっていう。

(高田委員)

いや、ATガイドの推薦者じゃないんですか。ATガイドとして認めますよという、この人はATガイドとしてふさわしいですよという推薦ではないのか。

(鈴木委員)

そうではなくて、今回の問題は、基準日数に達してる否か。

(矢ヶ崎部会長)

画面をちょっと下げてもらえますか。項目の(2)が見えるようにしていただきたい。

(鈴木委員)

ガイド従事日数(基準推薦者)について、日数、例えばその辺の低山でやってる人と、高い山をガーッと詰めてる人の、この人は200日というのは間違いなく山岳ガイドとして認めるというのは日数だけの話ですよ。高田さんのおっしゃるとおり、この人は○というのはマスターガイドではちょっと違います。と僕は理解していました。

(高田委員)

日数だけの話だったら全然かまわないと思うんですけども、じゃあ何の推薦なのかなと思って。

(矢ヶ崎部会長)

そのあたり事務局からも言っていただけますか。

(奥水課長)

今、議論がありましたとおり、この部分については200日とか120日とか、それ以上稼働しているかどうかというのを見ていただき推薦していただくことでございます。

今までの既存の5分野のガイドについてはマスターガイドと試験官のみだったが、新たに分野として追加したガイドについては、相当する者も認められていたので、そこを合わせるためにさせていただくところです。

あくまでも日数に達しているか否かをマスターガイド等に推薦してもらおうのですが、マスターガイドの方も全てのガイドを把握しているわけではないので、少し幅を持たせた推薦者の枠にした方がいいということから改正するものです。

あわせて、個人事業主の方は難しいですが、事業所に所属しているガイドであれば、事業者が証明をしていただけるはずですので、事業者からの推薦からもOKとすることで提案させていただいたところです。

(矢ヶ崎部会長)

はい、ありがとうございます。そういうことですので。

(高田委員)

わかりました。

(矢ヶ崎部会長)

ありがとうございます。はい。

では次の、今ちょっと画面に映っている3のところですね。令和5年度の委託事業について、移ってください。お願いします。

(伊東主幹)

はい。事務局からご説明させていただきます。

今年度、認定制度の運用について、委託事業を実施しております。

その中に部会の中でお話のありました、外部からの評価制度についても、委託をかけておりまして、今現在、事業者からまだ案っていうか、イメージなんですけれども、こういう形の評価にしたいというのが、図の方に示しております。

トップ画面とガイドさんの紹介、下の方にちょっと見えにくいんですけども、各お客様からのコメントと、星をつけた形の平均点数が、今のところ 4.1 になってはいますけれども、そういう形で、外部から見たときの、評価がわかるようにという形で今、事業者から出ているんですけども、今日、こういうものも入れたほうがいいのではないかというご意見、皆様の皆様からありましたら、ご意見いただければなと思っております。事務局からは以上です。

(鈴木委員)

顧客から見た時の評価ですよね。

(矢ヶ崎部会長)

ありがとうございます。今、受託事業者と事務局とでどうするかって話し合いをしているところで、この部会の委員の皆様方からもよりよいものにするためにアドバイスが欲しいという趣旨でよろしいですか。はい、ありがとうございます。特に AT ガイドの紹介のホームページであるとか、ホームページですね。顧客アンケートフォームの入力項目。すいません。この全体のところ今ご説明のあったところについて、もうちょっとこういうところが、あったほうがいいとか、ここはもう少し丁寧にとか、そういうことがございましたらご意見をいただきたく思います。

(鈴木委員)

フレームの話はいいんですけど、AT ガイドを紹介するホームページが問題ですよ。やはりどれだけ見てもらうか。

AT ガイド資格制度とったらこんなにプロモーションをしてもらえるんだというメリットを感じないと、この資格制度に乗ってくる人少なくなるよねって話をずっとしてたと思うんです。

例えばこの資格制度を取ったら、道内のウポポイをはじめ全部無料となる、ウポポイは添乗員は無料だけれどガイドは有料ですからね。みたいなことをメリットつけようぜとか、そんな議論をずっとしてきたはずですね。まずこのホームページは、どこに置くんですか。どういう SU をかけてどれだけのお客さんにどれだけのヒットさせるのか、その辺の戦略、作戦はどんな感じですか。今からですか。

(矢ヶ崎部会長)

ホームページの戦略はどんな感じですかね。

(伊東主幹)

とりあえず今年度作っていただくんですけども、北海道観光振興機構さんの。

(鈴木委員)

サイトのサーバーはない。新規サイトじゃない。

(伊東主幹)

ただ、アカウントは、北海道アドベンチャージャパンみたいなものを一つ取ることにしています。

(鈴木委員)

サーバーは機構のページの中ですよ。別の作りですか。

(伊東主幹)

別に作ります。

(鈴木委員)

はっちゃきになって、世界中のエージェントが個人旅行者が見えるように頑張ると。すごいお金かかりますよ。ちょっとその辺の提示が出てこないと議論のしょうがないかなってというのが1点。

2点目として、内容的には、問題がいっぱいあると思いますけどたたき台をもうちょっと作らないと、顧客アンケートって、例えば誰でも投げ込めるのか、そのひどい点数つけてる人がいたらあつという間に下がりますからね。

(伊東主幹)

そこを今どうしようかというところですね。委託業者から問いかけられて。

(鈴木委員)

そこも含めて提案してくださいということですよ。

(伊東主幹)

そうです。

(鈴木委員)

これは令和5年度委託ですから、いつ完成するんですか。イメージ、目標は。

(伊東主幹)

本当は11月くらいに第1弾として出てくる予定ではあったんですけども、ATWSのこともありまして若干遅れ気味になっております。

(鈴木委員)

サイトのオープン予定はいつですか。

(伊東主幹)

サイトのオープン予定は、本当は11月でしたが遅れております。

(鈴木委員)

年度内ですよ。

(伊東主幹)

年度内です。

(鈴木委員)

いやもう、ガイド制度の設計と同じぐらい大事なポイントですよ。情報発信っていう。今手元にいただいている資料は薄いかなと思いました。

(伊東主幹)

大変申し訳ありません。今お見せできるのがこの状態が精一杯でございました。

(矢ヶ崎部会長)

多分これの前段階の情報を欲しいですよ。要するに誰向けに何をどのぐらい、どういうふうに伝えていくので、こういう項目を入れたいとかね。そういう全体の設計の考え方みたいなものですよ。

(高田委員)

アクティビティサイズっていうのはこれ何ですか。

(矢ヶ崎部会長)

アクティビティサイズ、これは何でしょう。

(伊東主幹)

今回のATWSもそうだったんですけども難易度を示して、お客様にお知らせしているものと思うので、確かそれだったと思うんですけども。

(鈴木委員)

今まで私達初めて使ったことない言葉ですね。目的レベルですかね。レベル1から5のATのレベルですかね。

(伊東主幹)

確認します。再度皆さまにお知らせいたします。

(鈴木委員)

今矢ヶ崎先生が言ってくれたとおり、当然ATガイド資格制度の認知を広めて、受ける人を増やしたいという目的だってあるわけですよ。とすると、日本語で作るのか、エージェントに対して買ってくれ、個人客に対して示してくれっていう形でいくと、問い合わせからやりとりして受付するまでの導線、このガイドさんそれぞれ個人に直接問い合わせをして申し込みをしていいものなのか、多分、エージェントがとりあえずするとすると、個人のガイドに、あなたの自己紹介素晴らしいし、アクティビティレベルもぴったりだし、うちのお客さん送り込みしたいんだけど、例えば、あなたがツアー全体をツアーオペレートしてくれるのかって言われた時に、ガイドさんによってはバンザイしますよね。対応できるのはサイクリングだけなんだけどとか、そこの辺までちょっと設計しないと、このサイトの意味合いは形にならないかな。と思います。

(矢ヶ崎部会長)

単なる情報発信のサイトって、今時ありえないですよ、使えないので。今おっしゃった入口から出口までの導線ごとに相応しい内容があるはずなんで、そういうことも含めた設計がどうなっているのかっていうことがわからないと、ちょっとなかなか審議が難しいかなあ。荒井さん頭を抱えていらっしゃいますけど。

(荒井委員)

いや、そうなんですよね。たくさんあるけど今ちょっと整理されていることは、ガイドが北海道のホームページに載せて欲しいのはエビデンス。つまり僕アウトドアガイド持っているよと嘘でも言えてしまうんです。だけど、ここにオフィシャルに北海道が提示するガイドのこれがオフィシャルページですというのは一つ最低ラインとして持っていたらいいなって思っています。結構海外から問われるんですよ。よくあるのはにっこりマークの自分のウェブサイトに顔やプロフィールが載っていて北海道のガイドとなっているけど、本当かとなるので、ここのガイド一覧をクリックしたら他の人の第3者のホームページに飛んで、きちっとこの人がいる、そこで具体的にチェックする訳です。この役割は必ず必要だっていうのは一つ。ちょっとプロモーションとは外れるんですけど、そこは必ずっていうのをちょっと伝えます。

(矢ヶ崎部会長)

はい。そうですね。

(鈴木委員)

この今の、穿っちゃうと、その外注先さんをお願いする時の話が、ばふらっとしているんで、シンプルに言うと、今荒井さんが言ってくれた資格保有の証拠となるホームページを付けければいい話です。でもこれはその上に販促の要素を出そうとしているので、自己紹介とかレベルとか、

ガイドの評価を入れると。ガイドの評価はガイド制度を設計する時も、絶対入れたいよねって話もあったと思うんです。だけど、それが、さっきお話したとおり運用上、非常にリスクありますよね。だから、その辺のちょっと緻密な話を、発注者側が持ってないと、下請けはつけれないと思います。

(矢ヶ崎部会長)

はい。ありがとうございます。すみません事務局の方々、ちょっとこの議題に関しては皆さん、辛めのご意見ですので、ちょっともう1度整理をしていただいて、次回の審議までに、情報の整理をいただいた上で、もう一度出していただけるとありがたいかなあと。

(伊東主幹)

はい。わかりました。

(荒井委員)

でもこうやって具体的になってくるとできると思います。

(矢ヶ崎部会長)

はい。ありがとうございます。とにかく前に進めるという観点で物事を考えていくように。はい、それでは、全体を通しまして、今日の議題で対応して、何かご意見等ありましたから、いただきたいと思いますけれどもいかがですか。大丈夫でしょうか。

(鈴木委員)

次は、ごめんなさい。ぜひこの制度に本当に魂を入れるために、最初に、各ジャンルで誰に取ってもらわなきゃいけないのか、こっちから言ってお願いにしていくのかっていうのが、多分1丁目1番地。最初のホームページはざらっと名前が証拠として各ガイドさんが、ほら載ってるでしょというこれだけでいいので、そこはそんなに手間かけるよりも、まず先に誰が取ってもらいたいのかっていうことをきっちりやった方がいいかなと思います。

(矢ヶ崎部会長)

はい。ありがとうございます。やっぱりリスト固めないよね。ほか大丈夫でしょうか。いかがですか。特段なければ今日もいろいろなご指摘いただきました。貴重なご意見ありがとうございました。毎回、事務局が大変ですけれども引き続きよろしく願いいたします。今日は時間も押しておりますので、司会進行を事務局にお返しいたします。

(奥水課長)

はい。矢ヶ崎部会長ありがとうございました。その他、事務局の方から連絡事項がありますので、よろしく願いします。

(伊東主幹)

先ほどもご説明しました通り今年度もアンケートを予定しております。回答をいただいてから実際に会いに行くヒアリングも行おうと思っておりますので、集計次第、委員の皆様と情報共有を図っていきたいと思いますので、引き続きご協力よろしく願いいたします。以上です。

(鈴木委員)

ぜひ足元の商売の状態を、逆に僕も調べていただきたいです。

(奥水課長)

はい。次回、第2回目は、既に日程調整をさせていただいております、11月22日水曜日17時を予定しております。

この日出席できないという連絡をいただいている委員の方もいらっしゃるんですけども、最大数集まる日が11月の中旬で開催しようとするこの日しかなかったものですから、ご了承いただければと思います。開催の案内は別途、ご案内をさせていただきます。

それではこれもちまして、令和5年度第1回アドベンチャートラベル部会を閉会いたします。本日は誠にありがとうございました。